著者紹介

吉田知子　よしだ・ともこ

昭和9年浜松生れ。名古屋市立女子短大経済科卒業。昭和45年「無明長夜」で第63回芥川賞を受賞。

著書

『無明長夜』（新潮社）
『吉田知子作品選』（深夜叢書社）
『天地玄黄』（新潮社）
『生きものたち』（角川書店）
『聖供』（新潮社）
『鴻』（新潮社）
『蒼穹と伽藍』（角川書店）

猫の目、女の目

一九七四年五月五日初版発行

著　者　吉田知子 ©1974

発行者　大和岩雄

発行所　大和書房

東京都文京区関口一―三三
郵便番号　一一二
電話（三〇三）四五一一
振替東京六四二二七

印刷所　東光印刷
製本所　東京美術紙工
装　画　上野紀子
装　幀　中島かほる

0095-000740-4406

猫の目、女の目　吉田知子

大和書房

猫の目、女の目・目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日常小咄集

なぜか猫を見ると気が狂う　11
カゲ、ナクナレ　12
大食礼讃　14
睡中睡余　16
こちら、お友達　17
わたしは変態　19
梅毒・テンカン・骨膜炎　21
可愛いおばあちゃん　24
新入蓉口上　27
邪道酒　30
おいしい数学　33
おお、ディアパソン　36
非冒険者の旅　38
切り裂きジャック　42
いやさか　45
虫歯の唄　48
団地異変　51
転居趣味　56
ある恋と一枚のレコード　59
優雅で上品、その故に　65

ゲテモノ趣味 73
ひと喰いオトモ 69

女、不惑のやぶにらみ

老才女 83
永遠の謎 86
オンナ代表の弁 90
男はどこへ行った？ 92
ダンナさま、ご機嫌いかがですか 94
ユーモア、ユーモア 103
わが恋の絵合せ 111
恋、華やかな幻 118

大陸帰りの履歴書

感情乞食卒業 133
「青春」アレルギー 136
読書に淫した頃 139
ある出会い 143
教育ということ 147

十二歳までの履歴書 152
クロちゃんの子守唄 156
二人の祖父 162
私の中の父 167

のっぺらぼうの肉塊

宛名のない手紙 181
鴨 184
祭太鼓 185
信仰について 188
無人称 190
不適格者の弁 194
「無明長夜」の寺 198
死んだ深海魚のように 201
のっぺらぼうのオバケ 205
グロテスクの美学 215
幽霊、わが血縁 220
あとがき 230

猫の目、女の目

日常小咄集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なぜか猫を見ると気が狂う

なぜか猫を見ると気が狂う。山がけにちらとでも猫の形をしたものが目にはいると、もうおかしくなってくる。猫は蝶のように私の頭の中で乱舞しはじめる。まことに猫の歩行は小鳥の飛翔するに似ているではないか。いや、やはり蝶だ。小鳥には必死さがあり健気さがある。餌を求めているのか猛禽に追われたのか、または連れを捜しているのか大体察することができる。蝶となると、これは謎だ。なんのために舞っているのか。狂いまわるのがさだめなのか。猫は蝶に似ている。他のどんなものよりも。しかも、蝶は私の目の中を覗きこんだりはしない。ふいに人の背中に登ってきたりはしない。

もしも私に魂があるのなら、それは猫の形をしているのではあるまいか。それでなくてどうして私の気が狂う理由があろう。生垣の下からじっと私をみつめている大きな丸い目と柔らかな毛のかたまりをみつけたとき、私はアアッと声をあげてしまうのだ。そんなところに我が魂はさまよいいでていたのか。私のいままでの時間は見る間に色褪せ苔ざめる。猫の時間が私の時間になる。

猫を好きだと言えようか。犬は好きだ。馬も羊もナメクジも尺取り虫もいい。サソリにさえ

も奇怪な興味がある。しかし、猫は違う。猫は見ると気が狂う代物だ。考えてさえも私の指先にむず痒い毛の感触がよみがえり、あのしなやかな体が私の腿や胸や背中にまつわりついてくる。猫のことを考えると肩が凝る。猫は常に私にとっては幻だ。どんな猫も私のところにいつきはしない。毎日鰺を煮てやっても、いつか忽然と消えてしまう。何匹の猫のために私は泣いたか数え切れない。灰色と白の虎猫は激しく雨の降る夜、私の窓の下で一声凄じい叫び声をあげていなくなった。ある猫は台所の床にピンポン球ほどの丸いものを転がした。彼女は半日それを咥えたままでうろうろしていたのだ。それは彼女の産んだ仔猫の首だった。闇夜に拾ってきた猫は玄関の門灯で見たら腰から下がなかった。濡れていたのは溝に落ちたためではなかったのだ。

あの猫たち。幻の猫は決して消えない。スフィンクスよりも不可解な私の魂たち。ほら、見てごらん。私の意志とは無関係に波うったり、ちょっと曲ってみせたり、ピクピクうごめいてみたりしている私の長い尻尾を。

カゲ、ナクナレ

夜、ふいに立ちあがって足もとの影を見た。影は折れ曲がっていた。頭の乱れた髪だけが白

い壁の上で、いやに鮮明だった。なんとなく、なさけない心持ちになった。

自分の影をながめるのは何年ぶりだろう。何十年ぶりかも知れない。いや、初めてかも知れない。

私は子供のころから放心癖があり、いつでも歩き始めると同時に人も我も風景も何もかも忘れてしまった。だからもちろん自分の影など見たことはなく、友だちがなかったので影踏み遊びをしたこともない。影といえば、見たのは夢の中の狸の影くらいのものだった。それがどうして狸の影かわからないが、とにかく私は、それを見ると悶絶しそうなほどの恐怖感のために、もうその夜は眠られなくなるのだった。それが幾晩も続くと幼い私の頭の中は毒々しい赤紫色になった。

影というものは否応なしに実体が存在することを証明する。そこに、あるひとつのもの、重い肉体——粘った臓物、襞、臭気、液体、蝿のようにまつわりついて離れぬおびただしい想念——があって、それはどうしようもないものであるということ。どんなことをしても抹消できないということ。影さえ見なければその間は忘れていられるはずのそれらのこと。

深夜、ひとりの人間がおのれの影に向かって馬鹿げた呪文を唱える。カゲ、ナクナレ。カゲ、消エヨ。タダチニ消エウセロ。

大食礼讃

私は、しかるべき場所および行為について詳述することはできない。なぜかといえば、日頃極力それを無視すべく努めているためで、なにゆえかかる重要事にそのような態度をとっているかといえば、量の多寡や頻度などを気にしだすと、全くきりがないからである。今日は何回目だろう、四回目か五回目か、これは大変だ、臓物まで落してしまったにちがいない、とか、どうも五日以上御無沙汰しているようだ、これは足の爪先から頭のてっぺんまで私は或る種の物質で満たされてしまっていて、我が思考は我がものに非ず、既に全面的にその滞留客のものに変質してしまっているであろう、とか。

そうやって真剣に思い悩んでいるうちに、はや一日が過ぎ、次の日は次の日でまた新たに悩みだすという始末で、まことに非生産的にして悲観的なる限界状況に陥ってしまう。そこで私は一大決心を以て、そういうことは断固無視することに決めたのである。だから、書くことはできない。

もしも、ものごとの成果について述べることを忌避するならば、それのよってきたるところの原因、経過についても当然沈黙を守るべきだと思うのだが、それでは書くことがなくなるの

で次に食について言及する。

私は、すべての少食な人間が嫌いである。いみじくも、かのブリア・サバランの論破せる如く、美食家は常に大食家でなければならない。絶望的に肥大していなければならない。

私は自分では特に美食家だとも大食家だとも思っていないが、他家で食事をする際に出されたものは全部食べる習慣になっている。これは幼時より厳格に躾けられたためである。どんなにまずくても多すぎても、そのために死ぬようなことがあろうとも、よその家で供されるものは骨以外は、たとえ蝿の死骸であろうと断じて残してはならぬ、それが相手方への最大の礼儀である、と言われて育った。

そこで先日も某家で私はそのようにした。奇怪なことに、いくら辞退しても、あたかも魔法のように次々とおびただしい料理の皿が出現してくるのである。

止むをえないから私は決死の覚悟を定めて、ひとつ残らず完全に平らげた。すると、後日、その家で、そんな客は初めてだったとあきれはてているという香ばしからぬ噂が伝わってきた。それならば、あんなに無理をすることはなかったのである。

とは言え、習い性となっていることはしかたがない。その後で私は生れて初めて座談会というものをやった。

開始後十数分、ハッと気がついたら私の前だけ皿も鉢もきれいに空になっており、しかもその間発言皆無——どうも私は食べたり喋ったり同時にはできない仕掛になっているらしい。全然座談会向きではない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com